

2011 年 12 月 8 日

# ICTを活用した街づくりとグローバル展開に関する懇談会

## (第1回) への提出意見

野村総合研究所 シニア・フェロー 村上輝康

### 1. サービスドミナント・ロジックに基づく「ICTを活用した街づくり」

・ICTを活用した街づくりというテーマは、ともすると、いかにICTの技術や製品を街づくりの過程に提供するかというグッズドミナント・ロジックによる取組みになりやすい。

・「ICTを活用した街づくり」は、あくまで街づくりの主体の追求する価値を、ICTのサービスと街づくり主体が共創しようとするプロセスとみる、サービスドミナント・ロジックに立脚したものであるべきである。

・街づくりの現場感に立脚した取組みが重要。たとえば震後復興では、防災集団移転、土地区画整理事業、復興住宅事業等の具体的な街づくりの要件をふまえた議論が必要。

### 2. プラットフォーム構築を志向する「ICTを活用した街づくり」

・「ICTを活用した街づくり」には、様々な個別のアプリケーションの提案がありうるが、それらがまとまりをもって有効に機能するための連携や信頼醸成、インセンティブの仕組み等を持つ横断的な共通基盤（プラットフォーム）の構築を戦略的に推進する必要がある。個々のアプリケーションの議論にとどまることなく、街づくりとICTを繋ぐプラットフォームの基本的要件を提示することにも注力すべきである。

### 3. 「先端」より「最適」を目指す「グローバル展開」

・21世紀のグローバル経済は、先進国、新興国、企業のグローバル経済圏、その他という4つの経済圏の相互作用の中で形成されつつある。このような環境下でのICTの「グローバル展開」は、20世紀的な「先端へ、先端へ」というアプローチから、それぞれの経済圏のもつ特性に合わせた「最適」を目指すICTの「グローバル展開」でなければならない。

・「最適」を目指す取組みにおいては、従来のオールジャパンのアプローチでなく、必要であれば相手国の経営資源も取り込むジャパンイニシアティブの追求が重要。

### 4. 進出相手国からみた暗黙知の形式知化による「グローバル展開」

・サービス産業のグローバル化は、精緻で精密な日本的な暗黙知を相手国に合わせていかに形式知化するか、という段階から、いかに相手国の暗黙知を理解して管理できるように形式知化するかという段階に移っている。ICTの「グローバル展開」においても、「震後」という日本の特殊な状況を脱コンテキスト化し、相手国に合わせて再コンテキスト化するステップが必要であることを看過すべきでない。